

月例研究発表要目

- 第 51 回 昭和 46 年 12 月 20 日 島田太郎氏「メルヴィルの草稿について」
 第 52 回 昭和 47 年 2 月 7 日 平野信行氏「Yiddish Humor について」
 第 53 回 昭和 47 年 6 月 19 日 山川喜久男氏「史的言語学の動向」
 第 54 回 昭和 47 年 10 月 2 日 磯地明雄氏「“詩”について」
 第 55 回 昭和 47 年 11 月 20 日 新井皓士氏「閑人倶楽部『月刊評論』創刊号解題」

編集後記

「言語文化」という語は、朝もやの深くたち籠めた中に望み見る山影が、その頂上付近だけやや明確な線を見せている様子に似て、その意味のすそ野は杳として分明でない。そのことはこれを他の、とくにヨーロッパ系の言語で言い表わそうと試みる時、この語を用いる際、この語に托す情調までははじめから無理としても、その辞書的意味さえ、二三語を連ねるぐらいでは、完全には伝えがたいのではないか、という懸念がいつまでも残ることをみても明らかであろう。ともあれ第一義的には、「言語と文化」でもなく、「文化としての言語」でもさらになく、「言語としての文化」——「言語文化」であって、言語を通してでなければ、いや言語を通じてこそ捉えられるような文化の側面、という意味であろう。さらに言えば、言語を用いる際のその用いられ方に見いだされる、各人の、あるいは各文化社会の、世界への独自の関わり方、とってよいかもしれない。「はじめに行ない

ありき。」欲求とか情動とか認識などの行為、すなわち、こころ（意）として捉えたことばこそが「言語文化」の本質であって、本来フィロロジがその窮極の対象とすべきところのものに他ならず、『言語文化』もまたその追求をその主たる目標としているのではなかろうか。

編集の実質的な仕事は、創刊号以来ご協力いただいている志村俊司氏に、幸いにも、今回もまたお願いすることができた。ここに厚く感謝の意を表したい。

なお今年度は三城満禎氏が東京大学に転出され、あらたに、猪口弘之氏、井上修氏が語研のメンバーに加わられた。

ところで、次号で『言語文化』は第十号となる。新たな開花を待つこの十年間の蓄積という実りの一端を、何らかの、あるまとまった形であらわすことを試みることはできないものであろうか。

言語文化 第9号

1972 年 11 月 15 日発行©

編集 一橋大学語学研究室
 発行人

発行所 一橋大学語学研究室

東京都国立市中 2 の 1

印刷・精興社

GENGO BUNKA

—Cultura Philologica—

IX

1972

CONTENTS

Articles

- The Poetic Space.....Akio Isoji 3
An Essay on Georg Trakl (2)Hiroyuki Inoguchi 25
Who is Christ's Spouse?
—An Essay upon Donne's Holy Sonnet
'Show me ...'—
.....Joichiro Kawamura 49

Notes

- On Thomasius' *Discours* and *Gedancken*
.....Hiroshi Arai 67
A Bibliographical Note on Chota MAEDA's
Translation of the *Pensées de Pascal*
.....Masayoshi Hirota 87

Materials

- A Translation of the *Pensées de Pascal*
in the Meiji PeriodMasayoshi Hirota 97

Reviews

- Virginia Tufte: *Grammar as Style*Kikuo Yamakawa 129
A. L. French: *Shakespeare and the Critics*
.....Yoshiaki Fuhara 133
Gyula Illyés: *Puštavolk*Jiro Kato 137
Dee Brown: *Bury my Heart at Wounded Knee*
.....Nobuyuki Hirano 141

THE HITOTSUBASHI LANGUAGE INSTITUTE
HITOTSUBASHI UNIVERSITY
KUNITACHI, TOKYO
JAPAN